



## 縄文的過少生産社会

市川 聡

YNAC も今年で設立 25 周年。それまで私が勤めていたのが、環境庁。当時、国家公務員を辞めて屋久島に来たというので、「もったいない」とか「ぼっけ」とかさざん言われたものだった。

実は私が役所を辞めようと思ったのは、入って間もない国家公務員の合同初任者研修の時である。講演の間、竹刀を担いだ連中が通路を行き来し、寝ているものがいいたら打たれる。夜間はサーチライトを照らして見張っていて、脱走しようとしたものは、グラウンド一周うさぎ跳び。講演途中「私は神である。」と叫んだ男は、竹刀の輩に取り押さえられて、外に連れ去られる。全く訳の分からない研修を 5 日間過ごした後、「こんなところに長くいたら絶対おかしくなる。」と思い、5 年で辞めようと思ったのである。昨今の国会答弁に立つ官僚たちを見ていると、「やっぱりおかしくなったんだ。」というのが率直な感想である。

そんな公務員生活の通勤時間に読み漁ったのが縄文文化にまつわる本だった。屋久島にも一湊松山遺跡や横峯遺跡といった縄文時代の遺跡がある。昨年、横峯遺跡で竪穴住居を復元することに関わることができたのは大きな喜びであった。

縄文文化というと西日本に比べ東日本に大規模な遺跡が多く、サケなどの豊かな資源が先進的な文化を育んだと考えられてきた。

しかし縄文時代の重要な食物であった“どんぐり”を考えると、

東日本のナラに比べて屋久島のシヤやマテバシイの方がずっとおいしい。こちらの方がリッチとしか思えない。そのかわり、おいしい“どんぐり”は、サルやシカなどと競争になるので、大量に集めるのは難しい。一方、まずいものは競争が少なく、たやすく大量に集めることができる。冬越しが重要な地域では、土器によるあく抜き技術で、まずい“どんぐり”を食用化することに成功した縄文人には、これが有効な資源となった。大量の食物をストックするためには、大人数で協働することが有利である。厳しい環境が故、社会が大きくなっていき、大きな社会を効率よく動かすために階層化が進み、益々社会が複雑に発展したのが東日本の大規模遺跡だったのではないだろうか？

一方、屋久島のように、多くはなくても 1 年中何かの食べ物がある社会では、協働して余剰を作り、財の集中や階層化を生み、社会的なストレスを増大するよりも、小さな集団で、必要最低限の食物を集めるだけの労働しか行わず、残った時間をのんびりと歌って過ごすような過少生産社会を維持することが好まれ、大規模な遺跡を生まなかったと考えられている。

こうした社会の違いを豊かさを基準に評価するのであれば、果たしてどちらが豊かと感じるかは価値観の問題である。しかし人口減少時代に、GDP (国民総生産) を増加させ続けるというナンセンスな夢を追うよりも、もう一度社会のありようを見つめなおすことも大切なのではないだろうか？ いずれにせよ縄文的過少生産社会であれば、おかしな役人が生まれないのは間違いない。

## モスツーリズムについて

小原比呂志



### 屋久島コケさんぽ

屋久島で一番コケの豊かなところはどこでしょうか。

白谷雲水峡だと思っている人も少なくないでしょう。白谷は、確かにところどころ見事なコケ群落におおわれています。でもその中身は意外と単調で、少しコケが見えてくると、あまり面白味がないのです。

ではどこがもっともコケのいいところ、豊かなところなのでしょう？

『日本の貴重なコケの森』という、日本蘚苔類学会が選定する国内のコケの名所シリーズがあります。選ばれたところは、コケの景観が豊かな森から、見かけは地味ながら種の分布上非常に重要なところまで様々です。屋久島でこのシリーズに指定されたのは、「ヤクスギランドから淀川にかけてのコケ群落」なのです。

私はここで『コケさんぽ』と『コケ回廊』という、二つのエコツアーを担当しています。どちらもYNACのほかのツアーと同じく、屋久島の自然を楽しみつつ森と親しくなるためのプログラムなのですが、「コケが目に入ってくるようになってもらう」という特化したミッションが入っているのが他のものと違うところです。

面白いことに、森の深いところがコケのベストポイントではありません。むしろ森が何かの理由で一度壊れかけ、一時的に空いているところがねらい目です。

特にコケを見るための基礎練習をするところには、あたりにほかの人が目立つなど、気が散るところもふ

さわしくありません。有名ポイントでなくてもまったくかまわないので、静かでコケの世界に入り込めるところが、適しています。そうすると、車通りの少ない林道や、利用者の少ない登山道、沢などをポイントに選ぶことが多くなります。こういう場所の選定そのものも楽しい作業です。

こういった中で、さまざまな方法で、皆さんに「コケが目に入ってくるようになってもらう」ための手管のアイデアを工夫したり試したりしています。

### モスツーリズム・シンポジウム

さて、2018年6月、「奥入瀬渓流」を擁する青森県十和田市で、モスツーリズム・シンポジウムが開催されました。私も声をかけていただき、この集まりに参加することができました。

モスツーリズムとはなんでしょうか。実はこの言葉には、実態があるのかもしれないかまだはっきりしないのです。そこで、ここではその意味を、私なりに掘り下げてみたいと思います。

モスはコケのこと。この文章の主旨からしてガではありません。スギゴケとかゼニゴケなど植物のほうです。ツーリズムはもちろん旅行の仕組みのことですが、考え方というニュアンスを含むので、旅の楽しみ方とか、旅の流儀というような言い方がふさわしいかもしれません。つまりモスツーリズムとは、コケを切り口にした旅の楽しみ方、ということでしょう。

私は上記のようにここ何年か、コケをまさに自然を見るときの切り口にしてきたのですが、そのきっかけになったのが、青森県の奥入瀬渓流で展開された「モスプロジェクト」でした。これは天下の景勝として知られていながら、十和田湖観光の低迷とともに通過型の観光ポイントになってしまっていた奥入瀬渓流を、コケを切り口としたエコツーリズムで再生させたいというポジティブな企画でした。

このプロジェクトの中心人物が、奥入瀬のガイド会社ノースビレッジでエコツーリズム部門を率いていた河井大輔さんでした。

河井さんとは10数年ほど前に白谷雲水峡の駐車場で出会い、初対面にもかかわらず一時間立ち話をした、というだけの関係だったのですが、このモスプロジェクト主催のコケに関する研修会の講師の一人として、私を招いてくれたのです。

モスプロジェクトは、青森県がきちんと予算を計上



してバックアップする本格的な事業でした。奥入瀬渓流をフィールドとするボランティアからプロフェッショナルまでのガイドを集め、月に一度様々な専門家を講師として招いて研修会を催し、それぞれの切り口から、座学とフィールドワークを通じてコケに関する様々なことを学ぶのです。

講師は、分類や生態については全国の大学や博物館からのコケの専門家の先生がた、コケの楽しみを普及する立場として、著作『コケとあるく』の田中美穂さん、『コケはともだち』の藤井久子さん、そしてガイド論・ガイド技法についてエコツアーを行っている私といった顔ぶれでした。

奥入瀬渓流は、十和田湖の水がカルデラ壁を断ち割って流れ出した美しい川で、その豊かな流水と、親潮がもたらすヤマセの霧と雨とが、谷を守る溪畔林と、その林床をおおう美しいコケの群落を育てています。溪流沿いに国道と遊歩道が並走し、どこからでも近づくことのできるその便利さが、観光の対象としてはむしろ軽視される要因となっており、ここの自然を立ち止まってじっくりと楽しむという楽しみを確立し、広めることで、観光地としての新しい姿を創造したいというのがモスプロジェクトの目的でした。奥入瀬ではその後、蘚苔類学会の大会も開催されます。

しばらくして、日本蘚苔類学会の大会が北八ヶ岳で行われることになりました。登山の山として知られる南八ヶ岳が荒々しい山容を見せているのに対し、北八ヶ岳は針葉樹林の発達した穏やかな地形で、火山性の岩の重なる林床はコケの大群落に覆われています。

北八ヶ岳は、国道が標高2120mの麦草峠で山を横切っているため、奥入瀬と同じく非常にアクセスの

いいのが特徴ですが、そのために一帯の湖や森の中に点在する山小屋群が本来の価値を発揮しにくくなっていました。

ところが一帯のコケ群落のすばらしさとアクセスの良さに注目した国立科学博物館の樋口正信さんが、山小屋経営者の皆さんと力を合わせ、ここの苔の森としてのすばらしさを新たな魅力として確立し、夏も涼しい（なにしろ標高2000mを越えていますので）滞在型の自然探勝地として再生させようとしていました。

奥入瀬と北八ヶ岳。この二つの歴史ある地域に対し、屋久島はコケを看板とはしてこなかった新参ものながら、訪れる人はあきらかに、コケに覆われた森での経験を、とても深いものとして持ち帰ってくれています。多少うぬぼれてもいいのなら、屋久島はコケ界のラスボスとも言える存在でしょう。

次年度の屋久島大会の幹事として参加した私は、懇親会の席ですっかり嬉しくなり、「北八ヶ岳、奥入瀬、屋久島の三地域で『コケの三大聖地』を名乗り、コケの素晴らしさを伝え広めるべく協力して頑張りましょう」というようなことを（定かに覚えていませんが）発言してしまったのでした。

### 写真集にみる屋久島のイメージの変遷

屋久島ではコケについてどのような取り組みが行われてきたのか。掘り返してみよううちに、確かにきっかけとなるいくつかのポイントがありました。屋久島の森のイメージを鮮やかにデビューさせたのは、1992年に発表された山下大明（ひろあき）さんの写真集『樹よ。』でした。屋久島の森林生態系に深く切り込んだその作品群は、森の底に残された切り株や



倒木、それらを覆うコケやキノコ、小動物、落ち葉、再生した壮大なヤクスギ林などの題材を、時間をかけてじっくり見つめ続けた、それまで発表されたことのない視点だったのです。僕らがいつも見てるものって、これだね！という新鮮な感動を、当時の環境庁管理官だった小山真紀さんと、興奮して語り合ったことを、いまだに覚えています。

この深い森の姿は、当時知られ始めていた縄文杉とともに次第に広がり、世界遺産屋久島を強く印象付けるビジュアルイメージとなりました。

以降、さまざまな写真家や映像作家が屋久島のコケに覆われた森を題材とし、コケに覆われた深い森や縄文杉の姿を映しだすようになっていったのです。

世界遺産登録に先立って「エコツアーガイド」を名乗っていた私たちですが、コケに関しては悪戦苦闘していました。コケというのは、図鑑の絵合わせだけでは、どういうグループなのか仕分けすることすら難しく、手は出してみたものの、なかなかつかみきれないシロモノでした。コケの分類には顕微鏡や学术论文を使った専門的なアプローチが必要だったのです。

#### コケ研究者の来島と屋久島来訪者の増加

90年代から2000年代にかけて、コケの研究者の方々が、酸性雨の調査やレッドデータブックの調査などの目的で、しだいに頻りに屋久島を訪れるようになってきました。岡山理科大学教授の西村直樹さんは、屋久島のエコツアーガイド陣なら、コケについて仕込めば、屋久島をコケの伝道地にすることができるのではないかと考え、島内でコケに関する専門的なセミナーが頻りに開催されるようになりました。

また生態写真家の伊沢正名さんが分類学者の木口博史さんと組んで、屋久島環境文化財団から『屋久島のコケガイド』を製作したのもこのころです。

いっぽう2000年頃を境に、屋久島の森を訪れる人が急増していました。特に静かな観光ポイントだった白谷雲水峡利用者が『もののけ姫』の森のイメージもあって増え続け、縄文杉登山者も白谷を追うように増加して、2008年には年間で縄文杉9万人、ヤクスギランド10万人、白谷雲水峡11万人という前代未聞の活況になったのです。宮之浦岳を中心とする従来の登山者層はこれらの動きと



はほとんど連動せず、1万5000~2万人あたりで安定していました。

島内でも島外でもいまだに「山にゆく観光客が増えて…」云々という決まり文句で語られがちですが、実際には従来のままの「登山客」とも「観光客」とも違う、コケに覆われた深い自然林や、そこに息づく巨大なヤクスギの古木を求め、心の深いところでしっかりと結びつこうとする大勢の人たちが屋久島を訪れるように変化していたのです。

何かで知って長いことあこがれていたり、ふと思いついて突然行ってみたいと思ったり、きっかけはさまざまですが、それまであまり自然経験がなかった、という人が多いように思います。(それは面白いことに富士山を訪れる人と共通の特徴でした。)

その後、リーマンショックや東日本大震災の余波を受けてか、屋久島を訪れる人は減少をはじめ、縄文杉やヤクスギランド利用者は6万人台へと減り、観光は一時的に停滞しました。しかしその中でも白谷雲水峡は、ほぼ9万人台の比較的安定した利用が続いています。白谷といえば、もはやコケの森の代名詞です。屋久島は、これほど多くの人々が震災にも不景気も超えてはるばるやってくる、稀有な島になっているのです。このことこそが、モスツーリズムの基盤を作り出してきたと、指摘したいと思います。

#### モスツーリズム・シンポジウムの提起するもの

さて、モスツーリズム・シンポジウムではさまざまな報告や意見交換がなされましたが、私は上記のような屋久島の事例を報告したうえで、次のような視点を提起しました。

○ツーリズム、つまり観光の主体はあくまで訪問客である。モスツーリズムという切り口を通じて、訪問客は地域からコケを教わり、コケを理解し、コケを通じて

自然や地域とつながる。コケについて知識と経験を持ち帰れば、自分の地域やその他の地方とつながることができる。その地域と都市とが手を結ぶことができ、そしてコケは世界とつながっている。

○同じフィールドでも、登山とフォレストウォークとコケさんぽでは所要時間が全く違う。それは同じ空間にいても、受け取るものの密度が違うからで、結果として受け取るものが質的に変化する。立ち止まるから見てくる。つまりモスツーリズムを導入すると、観光コースが一粒で二度、あるいは三度おいしいという利用の仕方が可能になり、よりその土地を深く多面的に楽しむことになるし、地域側とすれば観光資源の有効活用ができることになる。これはそのまま滞在時間の長期化につながり、滞在型観光やリピータの増加に貢献するだろう。

#### 時空を超えるエコツーリズム、小さなものを特化したモスツーリズム

美しい海岸を車でドライブする。自転車で走る。のんびり散歩する。これらはどれも見えるものが違います。同じところでビーチコーミングや、ジオウォークをすれば、またちがった姿のものが見えるでしょう。スノーケリングやダイビングをすれば、これは同じ場所でありながらまったく別の世界です。またその海岸を飛行機で飛べば、もはや次元の違う体験になるでしょう。

同じ海岸線を見ているのになぜここまで違うのか。それは時空間のスケールが異なるからです。ヒトの能力を使えば、同じところをスケールを変えてみることで、全く違ったものを見、別の結果を得ることが出来ます。

また海外の大きな美術館に行くとしても、1日の



日程で、スピーディにすべての館内を回ってこの美術館をクリアしてやった、と考える人もいるのかもしれませんが。しかしそれは本当にその美術館を楽しんだり、学んだり理解したりすることになるのでしょうか。本気で美術館に取り組むのなら、一つの絵に取り組むだけだとしても、相当な時間がかかるでしょう。そして得るものは比較できないほど深いものになるはずですよ。

屋久島で縄文杉に行く場合はどうでしょうか。おそらくほぼ全員が、原寸大の風景を見ながら縄文杉を目指して歩いてくるでしょう。白谷雲水峡に行けば、やはり森の風景の中を見ながら太鼓岩をめざすでしょう。

でも屋久島の森の中にはさまざまな事柄が息づいており、それぞれスケールの異なるバラエティに富んだ何千万年、何億年に及ぶ物語を秘めているのです。これを聞かずに通り過ぎてゆくなって、なんてもったいない。スケールを変え時空を超えれば全く違うものがみえるはずですよ。どれもこれもヒトと同じスケールで生きているわけではありません。

人間としてのサイズをいったん置いて、ワイドに、マクロに、時空間を自在に行き来してさまざまな面白いものを慈しみ学び取る。それがエコツーリズムの楽しみ方です。

そのなかで、立ち止まらなないと見えないもの、視野の中にしっかりと存在しているのに、主体的に視線を向けなければその世界に入り込むことができないもの、つまりコケのような小さなものが見える窓をたくさん用意した自然の楽しみ方があるのです。

そのようにして自分の意識をしっかりと向けて、みずから様々なものをつなげた人は、それらを大切にしたいと思ってくれるでしょうし、その息づく環境の存在する意味に思いを寄せてくれるようになるでしょう。そしてそれはその人の内なる意識と細やかなまなざしを醸成してくれるでしょう。マクロで細やかなまなざしを研ぎ澄まし、小さく息づくものたちを慈しみ学ぶ旅。それがモスツーリズムです。

このように整理できたので、屋久島の楽しいコケさんぽやコケ回廊のツアーも、さらに明快な目標を持つようになったと思います。

「コケが見えてくるようになってもらう」。この楽しい課題へのトライを続けていると、つぎつぎに窓が開いてゆきます。そんな気分です。



私は、生まれも育ちも鹿児島県。

呆れられるほどの芋好きで、鹿児島のご当地ヒーロー「薩摩剣士隼人」の芋キャラクター「からいも子ちゃん」が出てきたときには、自分に似すぎていて驚いた。世の中には自分に似ている人が3人いるというが、その1人だと思う。

さて、一番好きな芋は「サツマイモ」。寒い冬にストーブの上で、甘い香りを漂わせながら芋が焼けるのを待つのが楽しみだ。

実は、鹿児島ではサツマイモとはあまり呼ばない。からいもと呼ぶのが一般的である。サツマイモが薩摩から伝わった芋だからそう呼ぶのであって、鹿児島の人にとっては、唐(から)から伝わった芋なので、からいもなのである。

だから、冒頭の芋キャラクターも「サツマイモ子ちゃん」ではなく、「からいも子ちゃん」なのだ。

現代ではスイーツ感覚のサツマイモだが、屋久島では主食として人々の命をつないできた。

水田を作るような土地もあまりなく、やせた土地でもよく育つ、そして、保存が効くということでサツマイモが、昔から作られていた。毎食、形を変えて食卓に出てきていたようだ。

その中で気になったのが、「べったいめし」。

お米が貴重で減多に食べられない時代は、芋を炊いた中にほんの少し米を混ぜて炊き、しゃもじでかき混ぜた「べったいめ



米が見えないくらい芋を入れて炊いたものを混ぜる。

し」というご飯が食べられていたようだ。

「なんて魅力的なごはん！」

試しに玄米と炊いてみた。

芋の甘さが口の中に広がる。昔は、漬物やトビウオの干物、ラッキョウをおかずにつたいめしを食べたらしい。甘い芋と、しょっぱい干物や漬物を交互に食べると、味に変化があり食も進みそうである。



サツマイモ以外でもおいしい芋がある。

#### 【カワヒコ】

驚きのもちもち感の芋が、「カワヒコ」という品種のサトイモ。地元の方には、「モチ芋」という呼び名の方がなじみがあるもので、屋久島の南部で主に作られている。

鹿児島の伝統野菜として、県のホームページでも紹介されており、江戸時代より少し前に、南方から屋久島町栗生に導入されたと伝えられている。いつからカワヒコと呼ばれているのかわからないが、古くから受け継がれてきたサトイモなのだろう。

サトイモの芋は、茎が肥大したもので、一般に、中心の親芋に子芋がつき、その子芋に孫芋ができる。

カワヒコは子芋も親芋も食べる。なので、握りこぶしよりも大きな芋と出会うことがある。

地元の方に食べ方を教えてもらうときに、口々に言われるのが、臭みが強いから、初めにゆでた汁は捨ててもう1回ゆでた方が良いと。

早速調理。切ってみると、ややピンクがかかった色をしている。普通のサトイモと違ってかわいい色合いだ。

教えられたように、ゆで汁を捨てて、さらに煮て、みそ煮にしてみた。

食べた瞬間の驚き！モチだ！！お雑煮のもちに近い触感。

原集落出身の友人によると、お正月には必ず、モチ



芋を甘く煮たものを食べていたらしい。

屋久町郷土誌によれば、湯泊や小島、尾之間などの集落の元旦の吸い物には、皮付きのサトイモ丸々1個入ったものだったとある。もしかすると、カワヒコを使っていたのではないだろうか。サトイモは子芋、孫芋ができるので子孫繁栄の意味も込めて、縁起が良いとして、雑煮のように主役級の料理だったのではないだろうか。

主役に出てきても文句なしのおいしさと存在感だ。

カワヒコの食感とよく似ていると感じたのが、沖縄や奄美大島でよく食べられている「タイモ(田芋)」。もしかしてカワヒコと同じ芋なのかな、と調べてみると、屋久島・種子島にも伝わっていて屋久島、種子島北部では「タイモ」、種子島南部では「ミズイモ」または「カワイモ」と呼ばれており、屋久島では永田地区でしか栽培されていないのだそう。



ベランダで育てているカワヒコ

タイモは浅い水を張った水田で栽培されることから、カワヒコとは異なるようだ。カワヒコは畑で栽培される。

子芋も親芋も食べるので、自家栽培ぐらいしか作られておらず、分けてもらったものを少し残して、ベランダ農園で、現在育てている。

収穫は12~3月。掘り起こすのが楽しみだ。

#### 【屋久とろ】

もう一つは商品名「屋久とろ」というヤマイモ。

こちらは、ヤマイモをすりおろしたものが冷凍パックされているもので、手軽に使えて、そしておいしいということで、年間8万パックを出荷するほど人気商品だそう。

カヤックツアーでも、ランチのうどんにトッピングとして出しているが、もっちりした粘りのおいしさに、多く



のお客様から、称賛の声をいただいている。

すりおろして商品化する前の屋久とろは、東南アジア原産の「ダイジョ」と呼ばれる「ヤマイモ」(ヤマイモの栽培学上の呼び方)の中の一つで「ソロヤム」と名付けられた芋。

普段何気なく「ヤマイモ」と呼んでいるネバナバ系の芋には、たくさん種類があり、日本各地で栽培されている。

ナガイモは北海道から関東にかけて、自然薯は青森以南、ダイジョは南西諸島を中心に栽培されていて、屋久とろの「ソロヤム」も暖かい気候が栽培に適しているようだ。

屋久島では、このソロヤムを契約農家が生産し、工場加工し商品化している。

ひとつ200円程度でスーパーなどで売られているので、屋久島から帰るときに買って持ち帰れば、自宅に帰り着くころには程よくとけて、そのままとろとしていただくことができ、お土産にもちょうどいい。



畑で栽培されているソロヤム

栽培されたものが流通しているが、天然のヤマイモも、野に入れば掘ることができる。

まだ私は、天然のヤマイモを掘ったことはない。

鹿児島の方言で、「ヤマイモを掘る」とは、酔っぱらって人に絡んだり、ブツブツ独り言を言い、管をまくことを言うが、どうやら、土の中にあるヤマイモを掘り当てるのに、あれこれ思案しブツブツ言うことから転じてそう言われるようである。



ヤマイモ掘りの様子

なかなか天然のヤマイモを採掘するのは手ごわそうだが、芋好きの私としてはぜひとも挑戦したい試みである。

屋久島にあるいろいろな芋。期間限定のものもあれば、いつでも手軽に食べられるものもある。ぜひ一度お試しあれ。

## 小杉谷前史

### —明治維新と屋久島の森林

松本 淳子

今年(2012年)は明治維新 150 周年ということで、NHK の大河ドラマでは「西郷どん」が放送されている。西郷さんは2度の島流しの往復時、少なくとも4回はこの屋久島近海を通過して、海に聳え立つ島影を見ているはずだ。いやそれだけではなく屋久島の北側の一湊村には途中立ち寄ったらしく「西郷隆盛上陸の地」の碑が建っている。

今回のドラマのロケ隊が来たという噂は聞いていないので、せめてセリフの中にもいつかは屋久島がでてくるのではないかと期待しつつ、我が家では毎週欠かさず見ているのである。

しかしどうも維新前後の西郷さん、薩摩藩にとって屋久島は面白いエピソードがなかったか、またはさほど重要ではなかったらしくこの原稿を書いている6月末までには、まったく屋久島の話しも杉の話しも出てこない。

西郷さんの島妻である愛加那(あいかな)さん達が栽培し生産する奄美の黒糖と共に、屋久島の杉材は薩摩藩の専売品だったわけだから、きっと当時の藩の経済を支えたに違いない、と思いながら明治維新を少し遡った辺りから歴史の断片を集めてみた。

まず明治維新の20年程前に薩摩藩は屋久島に向けて「山稼奨励達書」というものを発布していた。この場合の山稼ぎは奥岳での屋久杉伐採を意味する。なぜなら島民は里山での森林利用(薪炭、ハゼ油、桑の木、薬草園)は恒常的に行っていたからである。

つまりこの「達書」が出されたのは、奥岳で屋久

杉を伐る人が減ってしまったということなのだろう。薩摩藩による本格的な屋久杉伐採が始まっておよそ200年、人が入れるところの屋久杉はほぼ伐りつくしてしまったこと、屋久島近海で「カツオ」の大漁が続く「鯉節」作りに忙しかったこと、屋久杉は藩の専売品なので難儀な作業の割に島民たちの実入りは少なかったこと、などがその理由として考えられる。

一方「山稼奨励達書」を出した島津斉興(なりおき)時代の薩摩藩の状況はどうだったのだろうか。まず徳川幕府下では参勤交代や手伝い普請により藩が財力を豊かに保持することは困難であったと思われるが、家臣調所広郷(ずしよひろさと)が中心になり琉球口を利用した清との密貿易や黒糖生産で藩の財政はかなり立ち直った時期であった。しかし同時に宮古島には英国艦船、琉球には仏軍艦が来て貿易・開国を要求するということがおきていた。そしてこのことは薩摩藩にとって領地である琉球を失うという危機感だけでなく、助力を求めた幕府に冷たくあしらわれたことで自藩での軍備をせざるをえなくなり、多大な資金が必要となっていた。

そして後、幕府のお膝元横須賀にペリー艦隊が現れた。対外危機を乗り切るには幕藩体制という小さな政府の集合体ではなく、権力を集中して強い国を作らねばならぬと主張する斉興の嫡子斉彬(なりあきら)が登場し薩摩からの政治改革運動が始まった。ここからの顛末は西郷吉之助(隆盛)を始めとし登場人物も一気に増えるのでドラマや書物に任せるとして、維新の終盤それも屋久島の気配の漂うところだけを拾ってみた。

「西郷どん」のドラマの中にも出てくる「精忠組」のメンバーの一人に大山格之助がいる。彼は後に名を綱良(つなよし)と改め、明治維新後初めての県

令(鹿児島県知事)になった。大山は城下士を集めた私学校の徒を県官吏に取り立て、新政府が推し進める「廃藩置県」政策に逆行し、更には租税も納めなかった。

そして西郷や大久保のやり方を苦々しく思っていたのか、斉彬の弟久光と同様に江戸に出て活躍している彼らを悪し様に非難することもあったという。

やがて明治維新の立役者であった西郷自身も意見のくい違いから「維新政府」を見限ったように、その中枢を離れ鹿児島に下野してきた。

西郷が帰郷し、城下士たちの不満が日々高まる中、大山県令は屋久島の藩領地を島民に払い下げ、平川風之助という加世田出身の商人に安房と楠川における屋久杉の伐採を許可した。これが明治9年、西郷軍が官軍と戦った西南戦争が始まった年である。

平川は屋久杉伐採の収益金で金融業を起こし、大山は西郷軍に多大な資金提供をした。

しかし西郷軍は敗れ、大山県令は逮捕され明治10年処刑された。

平川はその後も屋久杉伐採を出願したが、鹿児島県は内務省へ進達、明治15年農商務省の指令で大山県令の屋久杉伐採等の許可を「県治条令」違反として取消し、伐採を禁止した。

屋久杉専売制を行使した「藩」が解体され、以降「屋久杉伐採」の許可を与えるのは「国」という道筋ができた。

権力を掌握した者がまず行うのは「税」をどこからどのように取るか、という算段である。新政府は地租改正に伴って官民有地区分調査を行った。全国的に土地の所有者が不明で納税が困難な入会地は事実上政府に没収された。屋久島においては「たと

え国有林になっても今まで同様に利用できるし、もし所有を主張した場合は毎年の税金が大変だ」という言葉を信頼したところが、実際には薪炭をつくるために山に入ることさえ規制されてしまった。そして統制監視機関として栗生、尾之間、安房、宮之浦、一湊、永田には山林監視所が設けられた。

上屋久・屋久両村が「こんなはずではなかった」と、国有林の下げ戻し申請を行い、明治37年に訴訟を起こした。16年に渡る裁判闘争の結果、大正9年「係争山林を原告が所有したと証明するものはない、維新後払い下げられた事実も証拠もない」として国側の全面勝利で決着した。

その上で、翌年国は「屋久島国有林経営の大綱」つまり奥岳(保護林・純官行施業林)を除いた前岳については島民の利益となるべき取扱いを行い、薪炭材等についても地元民生業の便宜をはかるとする、いわゆる「屋久島憲法」を発表し島民の経済的安定を保障する姿勢を見せた。

間もなく始まる「小杉谷伐採基地計画」には、どうしても地元の合意と労働力が必要だったのである。大正時代から戦争をはさんで48年間に渡った小杉谷における国策としての「屋久杉大伐採」の舞台はこのようにして準備されたのだった。

#### 参考文献

屋久町郷土誌第四巻 自然・歴史・民族

上屋久町郷土誌

西南戦争従軍記 風間三郎著 南方新社

偽金づくりと明治維新 徳永和喜著

新人物往来社

素顔の西郷隆盛 磯田道史著 新潮新書

小杉谷村落史 佐々彰聡作成

屋久杉が消えた谷 津田邦宏著 朝日新聞社

屋久島の山守千年の仕事 高田久夫聞き書き

塩野米松著 草思社



真っ青な空に、白く伸びる雲をたなびかせて飛び交う飛行機を見ながらビールを飲むのが、仕事を終えた一時の楽しみだ。これまでは、ただ眺めているだけだったが、この春お客様から耳寄りの情報を教えていただいた。フライトレーダー24というアプリを用いると、今、頭の上を飛んでいる飛行機が、どこから来てどこへ行くのか？、航空会社は？、機種は？といった情報が、リアルタイムで手に入るのだ。これにより、漫然と見ていた飛行機が突然命を宿したかのように、リアルな存在となった。

右は4月～6月にチェックした我が家（春牧）の上空を飛ぶ飛行機のスケジュールだ。飛行航路が微妙に変化するので見える日と見えない日があったりするが、基本的にはかなり正確にスケジュールどおりに飛んでくる。夜明けから午前8時くらいまでは、東南アジアから関西、名古屋方面に向かう夜間飛行の飛行機たちだ。私がスラウェシツアーで帰途に乗ったガルーダ・インドネシア航空のGA888便もこの時間、屋久島上空を通過する。思わず「お帰り」と声をかけてしまう。

ヤクスギランドの蛇紋杉東屋で昼食を食べているとよく上空を飛行機が飛んでいく。南へ向かうのは、タイ航空のバンコク行きか？

オセアニア方面からソウルへ飛ぶ飛行機が多く屋久島に向かってくるが、これは直前で北転し種子島の北を飛んでいくのは残念だ。ただ時折、上海に飛ぶニュージーランド航空の黒い機体にシルバーファーンのマークが見えることがある。そんな時は思わずガッツポーズだ。

タイトル写真は我が家で「金魚」と呼んでいるAirAsiaXのエアバスA330だ。こんな風の下から見ても楽しめる飛行機が増えると嬉しい。

通過時刻	航空会社	出発地	行先	機種
5:00	マレーシア航空	MH52	クアラルンプール	関空 A330-343
5:20-5:35	JAL	JL728	バンコク	関空 B787-8Dreamliner
5:40-6:20	タイ航空	TG622	バンコク	関空 A380-941
6:15-6:30	ベトナム航空	VN320	ホーチミン	関空 B787-9Dreamliner
6:20-6:50	ベトナム航空	VN340	ホーチミン	名古屋 A320-214
6:25-7:00	タイ航空	TG644	バンコク	名古屋 B777-3AL(ER)
6:40-7:10	JAL	JL738	バンコク	名古屋 B787-8Dreamliner
6:55-7:50	Scoot	TR868	バンコク	成田 B787-8Dreamliner
7:05-7:55	ガルーダ	GA888	ジャカルタ	関空 A330-343
7:15-7:40	ガルーダ	GA882	バリ	関空 A330-343
7:20-8:00	シンガポール航空	SQ618	シンガポール	関空 A330-343
7:20-8:15	シンガポール航空	SQ672	シンガポール	名古屋 A330-343
7:25-8:15	ANA Cargo	NH8560	那覇	関空 B767-381(ER)(BCF)
8:15-9:35	AirAsiaX	D7532	クアラルンプール	関空 A330-343
8:40-8:55	ピーチ	MM231	伊丹	那覇 A320-214
8:50-9:00	スカイマーク	BC591	神戸	那覇 B737-81D
9:00-9:05	ANA	NH1731	関空	那覇 B737-381(ER)
9:05-9:25	ピーチ	MM211	関空	那覇 A320-214
9:10-9:20	ジェットスター	GK351	関空	那覇 A320-232
9:15-9:25	ANA	NH763	伊丹	那覇 B787-8Dreamliner
9:15-9:25	ソラシドエア	6J23	神戸	那覇 B737-86N
9:25-9:30	ソラシドエア	6J67	宮崎	那覇 B737-81D
9:40-10:55	ANA	NH1747	関空	石垣 B737-881
9:50-10:10	トランスオーション	NU1	関空	那覇 B737-446
10:00-11:10	ジェットスター	3K777	ルソン	関空 A320-232
10:10-10:30	JAL	JL2081	伊丹	那覇 B777-346
10:35-10:50	JAL	JL2465	伊丹	奄美 B737
10:45-11:15	フィリピン航空	PR407	関空	マニラ A330-343
10:55-11:20	マレーシア航空	MH53	関空	クアラルンプール A330-323
10:55	スカイマーク	BC590	那覇	神戸 B737-8HX
11:00-11:15	スカイマーク	BC593	神戸	那覇 B737-8AL
11:00-14:55	パニラエア	JW873	関空	奄美 A320-214
11:25-11:50	ANA	NH1735	関空	那覇 B737-881
11:35-12:15	ANA	NH1749	関空	宮古 B737-881
11:40-12:45	シンガポール航空	SQ671	名古屋	シンガポール A330-343
11:45-14:10	ピーチ	MM213	関空	那覇 A320-214
12:05-13:00	シンガポール航空	SQ619	関空	シンガポール A330-343
12:10-12:20	ANA	NH765	伊丹	那覇 B777-281(ER)
12:15-12:20	ANA	NH764	那覇	伊丹 B787-8Dreamliner
12:20-12:45	AirAsiaX	XJ621	札幌	バンコク A330-343
12:20-12:45	スカイマーク	BC595	神戸	那覇 B737-86N
12:45-13:15	タイ航空	TG671	札幌	バンコク B777-2D7
12:45-13:20	タイ航空	TG623	関空	バンコク A380-841
13:00-13:15	ガルーダ	GA889	関空	ジャカルタ A330-343
14:00	シンガポール航空	SQ637	成田	シンガポール B787-10Dreamliner
14:40-14:55	ソラシドエア	6J25	神戸	那覇 B737-81D
14:45-15:00	ジェットスター	3K764	関空	マニラ A320-232
14:45-15:00	タイ航空	TG672	バンコク	関空 A380-841
14:50-15:15	AirAsiaX	D7536	クアラルンプール	関空 A330-343
14:55-15:25	ANA	NH766	那覇	伊丹 B777-281(ER)
14:55	ANA	NH1750	宮古	関空 B737-881
15:00-15:20	ANA	NH767	伊丹	那覇 B787-9Dreamliner
15:05-15:15	ピーチ	MM216	関空	A320-214
15:30-15:40	トランスオーション	NU5	関空	那覇 B737-446
15:55-16:05	Scoot	TR866	バンコク	関空 B787-8Dreamliner
16:00-16:05	JAL	JL2087	伊丹	那覇 B777-346
16:35-17:00	Scoot	TR700	シンガポール	関空 B787-8Dreamliner
16:40-17:05	デルタエア	DL39	シアトル	香港 B777-232(ER)
16:55-18:30	ピーチ	MM217	関空	那覇 A320-214
17:20-17:50	ソラシドエア	6J68	那覇	宮崎 B737-81D
17:30-18:00	ANA	NH1737	関空	那覇 B737-881
17:30-18:20	フィリピン航空	PR438	マニラ	名古屋 A321-231
17:40-18:10	フィリピン航空	PR408	マニラ	関空 A330-343
17:50-18:00	ANA	NH770	那覇	伊丹 B787-8Dreamliner
18:00-18:05	早期警戒管制機			B767改装
18:15-18:40	ソラシドエア	6J29	神戸	那覇 B737-86N
18:25-18:30	ANA	NH1738	那覇	関空 B737-881
18:30-19:20	セブ・パシフィック	5j828	マニラ	関空 A320-214
18:40-19:00	タイ航空	TG673	関空	バンコク A350,A380

※機種は変更されることがあります。

## エアバス (ヨーロッパ連合)



## 超大型旅客機

左：タイ航空A380

バンコクと関空を結ぶ総2階建てで世界最大の旅客機。4本の飛行機雲が力強い！

右：カリッタエア（アメリカの貨物航空会社）B747

フェアバンクスから嘉手納基地への貨物輸送か？元は日本のジャンボジェット？

## 大型旅客機

左：フィリピン航空A340

マニラから関空へ飛ぶ4発機。A380に比べて細身でエレガント。

右：ANA B777

双発の巨大エンジンで太目の機体を持ち上げる。東京五輪のペイント機。

## タイ航空A350

A340の後継で最新型。JALの次期主力機

右：シンガポール航空 B787-10

同機種で最も機体の長い10Dreamliner。ANAのB787-8は機体に787と大書されているのでわかりやすい。

## 中型旅客機

左：ガルーダ・インドネシア航空A330

バリやジャカルタから来る。青と水色のカラーが美しく、快適だった。

右：エアトランスポート国際B757

シンガポールから横田基地へ。米軍のチャーターと思われるアメリカの不定期便

## 小型旅客機

左：エバー航空A321

台湾の航空会社で台北から小松へ飛ぶ。サンリオとの提携でハローキティジェットもあるらしい。

右：ソラシドエア-B737

宮崎が本拠だがANA系列。これは熊本復興応援の「がんばるけん！くまモンGO」号。B737は下から見ると目玉があるのですぐわかる。

左：ジェットスターA320

オーストラリアに本拠を置くLCC。A321と基本は同じだが胴が短い。

## 番外編

右：早期警戒管制機B767改造型

航空自衛隊所属でフライトレーダーには映らないが午後6時頃北へ向かって飛ぶ姿を何度か見かけている。

## ボーイング (アメリカ)





私事ではありますが、平成30年3月に入籍し、約5年間育てていただいたYNACを退社いたしました。今の私があるのは今までお世話になったみなさんがあってのものとお心から感謝しております。本当にありがとうございました。退社は致しましたが、屋久島から離れるわけではありません。なぜなら旦那は屋久島人。というわけで、YNAC初、島に嫁いだ女子(?)として、徒然なるままに書き綴りたいと思います。

#### ほーおんこー?

よくガイド中に、屋久島で一番華やかな場所はお墓なんですよ。ご先祖をとっても大切にしているので・・・なんてお話しをさせていただいているのですが、まさか自分がそちらの立場になるとは！今では庭で綺麗な花が咲いていると、あ！ご先祖様に！とパチッとしている私がいま(笑)。

うちにはご先祖様のお仏壇があるのですが、そこにはいつも「お布施」が置いてあります。なぜかと旦那に尋ねたところ、お坊さんがいつ来るかわからないから置いてある、とのこと。ええ？普通お坊さんってなにかしらの節目でみんな集まった時にお経を読んでもくれるのではないの？と思ったのですが、ここではお坊さんのタイミングでご先祖様を供養してくれるようです。(あ。うちは基本的に家のカギをかけてないので、誰でもいつでもはいれるわけです。笑)です。家に帰ると「供養に参りました」という置き手紙とともに「お布施」が消え去っており、びっくりしたことがあります。

ました。しかし、それは基本的にお正月の間に行われるらしく、「ほーおんこー」というそうです。ググってみると「報恩講」。へえ。

#### なんまんさー。

そして、これも初めての経験だったのですが、旦那は友人の家に遊びに行くとまず「なんまんさー」します。そのおうちのご先祖様にご挨拶するという事です。今まで友人の家に行き、まず仏壇に行くという経験はなかったので、この所作にも驚き、ほんとにご先祖様を大切にすることが代々受け継がれていて、自然と身につけていることを目の当たりにし、ちょっと感動しました。

#### ばっば???

入籍とともに親戚が一気に増えました。そこで、気になるのが「呼び名」。屋久島に移住してから、近所の人は〇〇に、△△ねえ。ちょっと年上の方は〇〇おじ、△△ばいというのをよく耳にしていたのですが、ここでも新しい言葉がありました。それは、「おり」と「ばっば」。

一湊地区では「おじ」は「おり」。自分から近いおじいちゃんのことを「じい」、そして近いおばあちゃんを「ばっば」と呼んでいます。「おり」と「じい」、「ばい」と「ばっば」の境目は難しく、これからマスターしていきたいと思えます！

#### お返しはお米

親戚が増えるということは、冠婚葬祭に関わることも増えるということです。ここでも、気になることが。それは香典返し。最近ではお茶やコーヒーの詰め合わせを用意されている方が多いのですが、私たちが住んでいる志戸子住民への香典返しは別のものなのです。

それは「お米」。おかげ(?)で月1〜

2回はお米をいただくことがあり、ここに来てからお米を買ったことがありません。ところ変われば、です。

#### 「島いところ」そして「屋根親」

また、志戸子集落には他では聞いたことのないシステムがありました。それが「屋根親」です。まず、屋久島全域で知られる「島いところ」とは、血縁関係ではないのだけれど、何かのきっかけ(漁に出て天候が悪くなりお世話になったとか、山仕事とか)で知り合いになった他集落の人たちがまるで親戚かのようにお互いに行き来しあうことを指している言葉です。今のように移動が容易ではなかった時代にあわせて生まれた文化であり、誰でも受け入れ寛容な屋久島の人柄を作り上げてきたのではないかと思います。

そして、同じく時代に合わせて生まれたであろう「屋根親」。こちらはもし自分の身に何かがあった時に、子供の身元引受人になってくれる成人男女を指す言葉だそうです。必ずしも親戚が屋根親になるわけではないそうで、絆というか義理人情で動く懐の深さに私は感銘を受けました。

縁もゆかりもない屋久島に来た私の屋根親は間違いなくYNACスタッフです。本当にありがとうございました！そして、山に川に海にとご縁をいただいたゲストのみなさまにも感謝致します。またどこかで一緒に笑える日を楽しみにしています！



## 全国エコツーリズム大会 in 屋久島を開催して

松本 毅

2018年2月10日〜12日、屋久島において「全国エコツーリズム大会 In 屋久島」が開催された。10日開会式、11日分科会の2日間で地元屋久島や全国から延べ440人が参加し、エコツーリズムの展望について、また屋久島の未来について意見交換と議論が行われた。今年でYNAC設立25周年、世界遺産登録25周年の節目の年にこの大会が屋久島で開催できたことはとても意味のあることだと思う。



#### エコツーリズムとの出会い

1993年7月YNACを設立した当初、日本においてはエコツーリズムの議論がようやく始まったばかりだった。初めて私がエコツーリズムのシンポジウムに参加したのは、1995年JATA(日本旅行業協会)主催のシンポジウムで、そこで屋久島における「エコツアー」の取り組みを発表した。さらに、1998年「エコツーリズム推進協議会(日本エコツーリズム協会の前身)総会」にも呼んでいただいて以降、日本エコツーリズム協会の全国大会には毎年のように参加した。その中で気づいたのは、「エコツアー」と「エコツーリズム」は別物であるということだった。屋久島において、我々のような民間のエコツアー業者が生まれ、「エコツアー」の島という認識は高まったが、地域ぐるみでの「エコツーリズム」の議論は皆無であった。

#### 屋久島におけるエコツーリズムの議論

2002年屋久島環境文化財団が島内の関係機関による「エコツーリズム支援会議」を設置し、各組織の代表者が集まって『屋久島エコツーリズムの推進のための指針及び提案等』を作成した。2004年「屋久

島地区エコツーリズム推進協議会」を発足し、「屋久島ガイド登録・認定制度づくり」、「里の自然を活用したツアーの開発」、「西部地域の保全・利用のあり方」について議論を進めてきた。2009年には「屋久島町エコツーリズム推進協議会」と改め、エコツーリズム推進法に基づく「エコツーリズム推進全体構想」の議論を開始した。しかし、やはり環境省、林野庁、鹿児島県、屋久島町など行政主導の代表者による議論であったため、全体構想の中で縄文杉の入山規制について島民の十分な理解が得られず、「エコツーリズム推進全体構想」の認定にまでは至らなかった。2011年「屋久島町自然観光資源の利用及び保全に関する条例」案が議会において全議員一致で否決され、全体構想の議論は一旦終結した。

#### エコツーリズム大会の提案

その後は屋久島においてエコツーリズムという言葉が聞かれなくなり、2007年をピークに観光客が減少していくことに対する懸念の声が強くなっていった。しかし、全国的には、エコツーリズムの議論は高まっており、エコツーリズム推進法に基づく全体構想の認定を受ける地域が増えてきた。(平成30年4月現在、14地区が認定されている。)

私は、日本エコツーリズム協会の理事を務めており、近年の各地におけるエコツーリズムの議論の高まりを目の当たりにしてきた。そのような中で、エコツーリズムの島といわれた屋久島が取り残されていくのではないかとこの焦りを感じ始めていた。そこでもう一度屋久島においてエコツーリズムの議論を再燃させなければならぬという思いから、2015年5月屋久島町の環境政策課に「日本エコツーリズム協会 全国エコツーリズム大会の誘致について」という提案書を屋久島観光協会会長として提出した。この提案書は、すぐに決着をいただくことができたが、なかなか調整がつかず、ようやく2018年2月に開催することが決まった。

主管の環境政策課と打ち合わせをしながら日本エコツーリズム協会との調整をはじめ、大卒の基調講演、分科会などを決定していった。

今回の大会では、5つの分科会を置くことになったが、どの分科会も私にとっては強い思い入れがあった。

## 《第1分科会》屋久島町観光基本計画

### 屋久島の将来像

2016年3月に屋久島町観光基本計画が策定されたがその後具体的な取り組みがないまま1年が過ぎてしまった。町長が観光立町を宣言し、せっかく基本計画を策定したのであれば今具体的にやれることは何かを探って、一つでも実現していくことが重要ではないか。屋久島の将来像は、観光業なしには描けないと思っている。

## 《第2分科会》エコパーク構想

### 口永良部島を中心にエコパークを考える

口永良部島では、以前から数少ない若者たちや子供たちが島を盛り上げようと頑張っていた。しかし、2015年に新岳が噴火し、およそ7か月間全島民が屋久島で避難生活を余儀なくされた。その後、2016年ユネスコエコパークが口永良部島を含むエリアに拡大されたのでこれをきっかけに口永良部島の復興、地域おこしの具体的な取り組みを始めることができればと思う。

## 《第3分科会》環境保全と入山協力金

### 現状と協力金のあり方について考える

世界自然遺産屋久島山岳部環境保全協力金が始まって1シーズンを終えた。2シーズン目に向けて、現状と課題を洗い出し、より良い制度の実現を目指すためにどうあるべきかを考え、全国の先進地事例となりうる制度にしていきたいと思う。

## 《第4分科会》地域としての取り組み

### 里のエコツアーや一次産業・二次産業と観光業の関わり

常日頃から屋久島で「エコツーリズム」の議論が広がらないのは1次産業の参画がないからだと思っていた。すでに7地域で取り組まれている里のエコツアーをより1次産業2次産業と結び付け、観光業とのつながりを強くしていけたらと思う。

## 《第5分科会》ガイド登録認定制度について

### 認定制度を考える

知床、小笠原、奄美大島など全国的にガイド認定制度が立ち上げられている。その多くが屋久島の制度をモデルとしている。早くから認定制度に取り組んでいる屋久島の制度を他地域のガイド関係者らと検証し、地域にとってより良いガイド制度を考えていきたい。

私としてはすべての分科会に参加し、多くの方々の意見や議論を聞きたかったが、それは参加された皆さんにお任せした。いろんな方からのいろんな意見が出されることがまずは始まりだと思う。

近年各地で行われてきた全国エコツーリズム大会は、地域における旗揚げ的な大会であったり、全国にアピールをするための大会であった。しかし、エコツーリズムの先進地といわれる屋久島では実は多くの課題を抱えながらやってきたこと、そしてそれらの課題はこれからの屋久島のみならず、全国でエコツーリズムに取り組む地域においても避けては通れない課題であると思われる。屋久島の事例は全国の先進地事例となりうるのか、全国の方々と地元の我々が共に徹底して議論、検証をしたいと思った。今回ご協力をいただいたコーディネーター、パネリストの皆さんは、各分野の第一線で活躍されている多忙な方々だが、お願いをすると皆さん快く引き受けてくださり、とても豪華な顔ぶれとなった。参加者からはどの分科会も参加したくて選ぶのにとても悩んだとお声をいただいた。すべての分科会の模様は屋久島町のHPで公開している。

(<http://www.yakushima-eco.com/ecotourism/>)

## 大会の準備

大会の準備は、関係者だけでなく広く呼びかけて実行委員会形式をとった。昨年取り組まれた「縄文杉発見50周年記念イベント」では、様々な業種の人々が実行委員会に参加し、とても広がりのあるイベントとなった。今回もぜひ実行委員会形式にして参加をさせてほしいとの意見をいただき、14名の有志により実行委員会が組織された。言い出しっぺで



ある私が実行委員会委員長を務めさせていただ

た。委員会に若い人たちが積極的にかかわってくれることはとても心強いことだった。これからのイベントは、このような幅広い人々に呼びかける実行委員会形式をとるべきだと思う。

## 大会の成果

分科会の時間を十分とったつもりであったが、実際開催してみると、参加者の方からの意見が多く出され、とても5時間では足りないほどだった。このような発言の場はもっと必要であり、この大会を機に屋久島の中で意見交換の場を作っていけたらと思う。

## これからの屋久島のエコツーリズム

大会宣言の作成には大変悩んだが、漠然としたものではなく、明確にこれから取り組むべき指針を示すものにしたいと思い、以下のような大会宣言となった。(文末に掲載。)

現在この大会宣言を受け、屋久島町エコツーリズム推進協議会では、2020年エコツーリズム推進法に基づく全体構想の認定を得ることを目標に議論を再開することを決定し、先日特定観光資源の検討をする作業部会が結成された。また、ユネスコエコパークに関する管理計画の策定の動きも始まっている。

当初から、この大会は開催することが目的ではなく、次のステップのためのキックオフ大会とすべきだと考えていた。今、大会宣言を受けて、屋久島でのエコツーリズムの議論が再開されようとしている。屋久島の人気は右肩上がりであり詰めていたころとは状況がずいぶん変わってきている。観光客が減少してきた今、冷静に屋久島の将来を考え直すいい時期が来ていると思う。屋久島憲章、屋久島町観光基本計画、エコツーリズム推進法に基づく全体構想、「全国エコツーリズム大会 in 屋久島」大会宣言、これらをしっかりと手元において、着実に前に進んでいくことを期待したい。

最後にこの大会に出席いただいた、愛知 JES 会長、田川 JTB 会長、コーディネーター、パネリストの皆様、JES 理事の皆様、実行委員の皆様、屋久島町環境政策課をはじめ職員の皆様、学生ボランティアの皆様、そして参加をいただいた参加者の皆様に改めてお礼を申し上げます。

## 「全国エコツーリズム大会 in 屋久島」

### 大会宣言

町政推進の指針となる屋久島憲章では「この島の自然と環境を私たちの基本的資産として、この資産の価値を高めながら、うまく活用して生活の総合的な活動の範囲を拡大し、水準を引き上げていくことを原則としたい」とエコツーリズムの姿勢を示している。

屋久島町制施行から10年・縄文杉が発見されて50年・明治維新から150年というこの節目の年に私たちは、屋久島町の姿を振り返り大いに議論してきた。世界自然遺産に評価された屋久島と全島が国立公園でユネスコエコパークである口永良部島の美しい自然景観と豊かな生物多様性を人類共通の財産として後世に受け継ぎ、「いつでも・どこでも・おいしい水が飲め、人々が感動を得られるような水環境の保全と創造を維持できる」ことを大きな目標として、世界自然遺産25周年目を迎えようとするこの年に、私たちは次のことを決定した。

#### 1 観光基本計画の実現

屋久島町観光基本計画に謳われた基本理念である「エコツーリズムによる世界自然遺産『屋久島』の価値創造と観光立町」の実現を目指して、町民・行政・来訪者が積極的に取り組んでいきます。

#### 2 屋久島町エコツーリズム推進全体構想の認定

環境保全と協力金の在り方や地域と一体となって基本理念を推進するために「エコツーリズム推進法」に基づく全体構想の認定がされるように全町を挙げて再度取り組んでいきます。

#### 3 ユネスコエコパークを活用したまちづくり

爆発的な噴火があった口永良部島の復興をより強力に推し進めるために、管理運営計画を策定しユネスコエコパークを活用したまちづくりを目指します。

これらを私たちは、島民だけの宝ではなく、全国、全世界の人々の宝として認識し、柔軟に力強く誇りをもって取り組んでいくことを宣言する。

平成30(2018年)年2月11日

全国エコツーリズム大会 in 屋久島参加者一同



## Calendar・2017-18

2017

- 7/18-20 松本 JESガイド講習会檜原村講師  
7/21-23 四万十高校研修旅行受け入れ  
7/21-24 SSH 春日部高校・茗溪学園研修旅行受け入れ  
7/22 福留 屋久島学ソサエティ西部地域観察会参加  
7/29-31 岡山理科大学教員免許更新講習講師  
8/1 東京農大一高西部実習受け入れ  
8/1-3 霧多布高校研修旅行受け入れ  
8/15 小原 NHKスペシャル「屋久島伝説の趙巨大杉」に出演  
8/19-20 松本 青森県ガイド講習会青森講師  
8/25-26 松本 東京環境工科専門学院スノーケリング実習  
8/30-9/3 岡山理科大学エコツーリズム技法講師  
9/8-9 松本 東京環境工科専門学院スノーケリング実習  
9/18 市川 横峯遺跡のテレビ番組に生電話出演  
9/19-20 小原 好日山荘机上講義/銀座・池袋・横浜店  
9/28-30 松本 JES企画委員会参加  
10/3 松本・福留 海難救助訓練参加  
10/9-11 八代市五家荘観光ガイドインストラクター講習会受け入れ  
10/11-13 松本 JNTO 海外支店視察受け入れ  
10/12-14 YNAC ショップ入口サッシの改装  
10/27 JNTO フランスメディア招聘受け入れ  
10/30-31 松本 JES ジビエ会議参加 和歌山  
10/31 SSH テレメ調査下見 西部林道  
11/2 山の神祭り/益救神社にてお祓い  
11/11 市川 資源素材学会九州支部地質巡検受け入れ  
11/15 経営革新フォローアップ聞き取り  
11/18 小原 「世界自然遺産によるエコツアーDMO 形成のための中核人材育成教育プログラム」講師  
11/20-24 松本 JES 奄美・徳之島ガイド講習会講師  
11/30 渡部 寿退社・非常勤に  
11/30-12/4 小原 鹿児島大学台湾視察同行  
12/9-11 屋久島学ソサエティ  
12/12-13 松本JES地域コーディネーター屋島  
12/12-15 福留 ガイ連鹿児島研修参加  
12/19 松本 JES地域コーディネーター河口湖  
12/22 松本 JES地域コーディネーター甑島  
12/26-28 岡山理科大学附属高校研修旅行受け入れ

2018

- 1/5-7 大阪生野高校研修旅行受け入れ  
1/8 大阪大学超域イノベーション博士課程野生動物実習受け入れ  
1/10-11 松本 JESガイド講習会檜原村講師  
1/15-17 松本 環境省人材育成講習会講師  
1/20 松本 「世界自然遺産によるエコツアーDMO 形成のための中核人材育成教育プログラム」講師  
1/25 松本 鹿児島県ジビエシンポジウム参加  
1/29-30 八代市五家荘観光ガイドインストラクター講習会受け入れ  
2/10-12 松本 全国エコツーリズム大会屋久島実行委員長  
2/19-22 松本 JESより屋久島へアドバイザーとして派遣される  
2/23 小原 京都にて屋久島研究発表会に参加

## Contents

巻頭言	市川 聡	1
モスツーリズムについて	小原比呂志	2
屋久島の芋を追い求めて	福留千穂	6
小杉谷前史-明治維新と屋久島の森林	松本 淳子	8
屋久島上空飛行機図鑑	市川 聡	10
屋久島の嫁入り	渡部 幸	12
全国エコツーリズム大会IN屋久島を開催して	松本 毅	13

- 3/8-12 松本 JESより甑島へアドバイザーとして派遣される  
3/10-17 市川 第1回スラウェシアツアー講師  
3/14 小原 屋久島高校白谷雲水峡野外実習講師  
3/24-25 松本 モンベルフェア大阪参加  
6/1 小原 好日山荘机上講義横浜店  
6/2-4 小原 奥入瀬コケ旅行プロジェクト講師  
6/24 松本 青森県ガイド講習会青森講師  
7/25-28 春日部高校・茗溪学園実習受け入れ  
7/28-31 岡山理科大学教員免許更新講習

## 執筆・取材記事

- ・日本エコツーリズム協会会報誌76号「屋久島は何故エコツーリズムの島になったのか」(松本)  
・スカイワード2017年9月号「エコツーリズムの島屋久島」(松本)

## 編集後記

この4月から毎日ジョギングを始めました。これからは体力維持が大事！(タケ) 新たなステージへ突入しました♪(さ) 紫陽花は梅雨入りも明けもピタリ当て(J) 野鳥のかわいい表情を撮るのにはまっています(ち) 今年の酷暑で、ついにヤクザルたちも泳ぎ始めました。3匹の子猿がかわるがわる泳ぐ姿は実に楽しげでした。涼しげなスクープ写真をどうぞ！(い)



## YNAC 通信(ワイナックつうしん) NO.35

発行日:2018年8月1日

発行:(旬)屋久島野外活動総合センター

住所:〒891-4205 鹿児島県熊毛郡屋久島町宮之浦368-21

TEL 0997-42-0944 FAX 0997-42-1850

E-mail: forest@ynac.com URL: <http://www.ynac.com/>

Facebook <http://www.facebook.com/Ynacyakushima>